

ホトトギス

昭和二十四年三月二十八日運輸省特別扱承認誌第六二七号
平成二十五年十二月一日発行(第百十六卷第十二号)

ホトトギス

十二月号



俳句随想 〔三百七十八〕

汀子

芭蕉が俳諧連歌の第一句を独立し、発句という詩型を作ったのが俳句の成り立ちであることはすでに皆様御存知のことと思う。発句には必ず季題（季節の言葉）が入らなくてはならない。その十七文字に続けて連歌が編まれていくのであるが、それらが続けられるような内容の広がりにならないければならないわけで大変重要なものと言われて来た。余り軽々しい発句はないとも言われるが、ああそうですか……と終ってしまうと発句にはならないのであろう。子規は芭蕉が発句と言っていたのを俳句と言うようにした。我々はそれを踏襲して今日に至っている。一句の価値観は、そこからどれほどの内容の連歌が巻いていけるかということにその価値観が問われるのであるが、余り難しく考えて行くこともないであろう。文字を語るのには時にその源を尋ねてそこに至る道程を辿ってみるのも時に大事な発見があるかも知れない。如何に佳い俳句を作るか追求するために原点に戻って見るのも大事なこともかも知れないと最近頻りに思っている。

旬日記 汀子

平成二十四年十二月二日 芦屋ホトギス会

先づ外の寒さ逃れて着席す
放談を終へて忘れてゐし寒さ
運転の検定冬の空の下
蹴散らして踏みつけて着く落葉かな
十二月二日 下朝句会

そのままに櫛落葉を尽すまで
案外に冬木となりし明るさよ
癒えし人迎へあまねく冬日和
大方は出席となる師走かな
短日のはじまつてゐる早出かな
十二月三日 ロイヤル俳壇

冬ざれといへぬ華やぎありしこと
息白く見送る無言ありにけり
冬帝に守られし身と心して
冬ざれといふには黄色多過ぎる
考へてみれば師走でありしこと
十二月四日 有恒俳句会

年忘熱しき料理も味の内
皆落葉しぐれ逃れて囲む卓
散り尽くすまでの紅葉は風のもの
所在なき庭師となりぬ風紅葉
風に乗り遅れたるあり散紅葉
短日の何か忘れてをりしこと
名苑に散れば絵になる紅葉かな
十二月四日 無名会
初時雨とは朝の間のことなりし

晴れてゆく風音落葉巻き込みて
もう一つ予定抱きて街師走
街師走かけ持ちの会間に合ひし
忘れ得ぬことを抱きて年忘
白鳥の水辺の綺羅を旅便り
初雪の来るかも知れぬ街に出る
十二月四日 日本伝統俳句協会忘年会

名苑の落葉しぐれを浴びて来し
会場の明るきことも年忘
寒きこと皆口にせぬ集ひかな
十二月八日 九州ホトギス俳句大会前日句会
枯山のどの稜線が由布なるや

止みさうに止みさうに雪つのりをり
雪雲に隠れし方が由布ならん
寒さうな顔が写されをりにけり
皆家に師走の顔を置いて来し
十二月九日 九州ホトギス同人会
舞ふ雪の積る心のありそめし

魔物とも魔法使ひかとも雪よ
この雪を喜んでゐて帰路忘れ
高原の雪の夜明となりにけり
十二月九日 九州ホトギス俳句大会
太陽と雪の共存ある山路
雪しまき表情二転三転す

十二月十一日 大阪倶楽部
初氷踏みし早出の苦にならぬ
短日の済ませ置かねばならぬこと
短日の暮れ落ちて着く会となる
雪の舞ふ辺りを約せし彼の雪の葬
又逢ふを約せし彼の雪の葬

もう逢へぬ雪の別れとなりにけり
十二月十一日 綿業倶楽部
早発ちの寒さは承知上京す
大玻璃の向ふの寒さ忘れぬ話
寒さうな表情ほどけゆく会話
十二月十三日 清交社
白鳥に紛れ絶滅危俱の来し

まだ少し風の寄り道枯尾花
乗り越えて行かねばならぬ寒さとも
先づ予定表よりは年用意にも及ぶ
十二月十四日 工業倶楽部
離陸して忽ちまどふ冬霞
なほ風に従ふ心枯尾花

挨拶のこはばつてゐし冷たさよ
十二月十九日 夏潮句会
マロニエの枯木孤高にありしこと
散紅葉庭の一劃あるがまま
金星の昇りはじめし寒さかな

日当れば色を集めて散紅葉
皆の目を集めたるより散紅葉
生姜酒禁酒の枷を解かざりし
十二月二十一日 時雨句会
普段着に軽きコートといふ外出
笹鳴の所在の距離の縮まらず
早々と冬至の暮れて一句会
上京に師走心を持ち歩く
一筋の明り消すより鬮汁会
十二月某日 アサヒカルチャー新館祝句
新しき心に集ふ会の春

廣太郎句帳

廣太郎

平成二十四年十二月一日 芦屋ホトギス会

杜の木々色整へて神迎
運転を未だ続けるといふ寒さ

十二月二日 野分会普屋例会

マスクして六甲風遠く聞く
社会鍋トランペットの音乾き
マスクして自分を消してゆく女
社会鍋国防軍といふ議論
マスクして銀行の裏口に居り

十二月五日 カトリック新聞選者時

新しき駅舎長き夜灯しけり

十二月六日 蕉心会

朝時雨駅までの徒歩断念す
羽広ぐより詩を紡ぐ都鳥
冬うらら芥の掛かる竿二本
白々と水を褥に都鳥
都鳥浮いて沈んで飛んで消ゆ
あんた其処出たら都鳥とちやふで
山茶花の一片欠けて整ひぬ
日記買ひ気付きしダブルブッキング
小春日のやうなゲストでありにけり

十二月七日 六甲会

ちやんちやんこ着て嫡男といふ運命
湯豆腐にたつこの醤油てふ至福
ちやんちやんこ召されて白寿恙無し
あの人の句柄は若しちやんちやんこ
湯豆腐や酒ほどほどといふ決意
湯豆腐の湯の中で舞ふフロンドかな
納句座今夜のワイン何にする
ちやんちやんこ十秒前を忘れをり

十二月七日 虚子記念文学館投句

館に入る一步に眩し冬紅葉

十二月八日 九州ホトギス同人会 大会

プロペラ機大揺れに揺れ冬うらら
無事車輪出て冬枯に着陸す
雪雲に塗り替へられし豊後富士
天国に近しと思ふ雪の嶺々
ブルゴーニュワイン二本の年忘
後る髪雪に引かれてをりにけり

十二月十日 朝日カルチャー若草句会

猫も又師走の顔で寝てをりぬ
冬の蝶結界といふニメートル
豊後富士師走の髪の深さかな
スケジュール再来年までてふ師走

十二月十三日 田鶴近詠

暖房の調節といふ難しさ
豊後富士雪が描いてゆきにけり
雪雲に突つ込んでゆくプロペラ機
白きものあれば冬蝶飛んで来る
師走とは別の顔してゐる猿

十二月十三日 玄海近詠

虚子句碑に見ゆ落葉を踏みながら
九州に雪連れて来し雨男
枯尾花名も無き山を従へて
句碑の威に由布の雪雲払はるる
凍雲を吐き出してゐる豊後富士

十二月十三日 土筆会

余呉の湖歴史もろとも鳩潜る
句碑沈め鳩の海てふ淋しさに
紅葉散る江戸の文化を染め上げて
襟巻の狐笑つてをりにけり

十二月十八日 草木瓜会

漱石忌 人生五十年の頃
山会は今も続きて漱石忌
漱石忌 鼠を捕らぬ猫ばかり
マフラーに君との距離を近付けて
漱石忌 愚陀仏庵も流されて

十二月二十日 登高会

風音を楽と聞きつつ葉喰
湯ざめして第九を遠く聴いてをり
極月や自転車走る走る走る
明らかに湯ざめしてゐる電話口
先づワイン選ぶことより菓喰

十二月二十二日 伝統俳句協会神奈川・東京合同部会

息白く鏡に師走の君の嘘
地下一歩入れば師走の歩幅かな

十二月二十三日 野分会東京例会

君に嘘つきたくなってマスクする
マスクの目帰らないでと言つてをり

十二月二十五日 若水句会

初氷とは壊されるために張る
クリスマス都心に星座整へり
名曲を奏でるやうに毛糸編む

十二月二十五日 若水句会忘年会余興しりとり句会

地下抜けて電飾抜けて年忘
納句座果てて消えゆく二人かな

十二月二十六日 目黒学園句会

都鳥言問ふやうにたゆたへり
河豚鍋や中りし人もその中に
極月の路地でふ猫の居場所かな
水を恋ひ詩を恋ひたる都鳥
中りしは河豚には非ず君の毒
花八手聖歌洩れ来る庭に揺れ

十二月二十八日 カトリック新聞選者時

雑詠

廣太郎 選

水替へてやりし金魚へ愛わきぬ 我孫子 副島いみ子
 人間をどう見てゐるや金魚玉 同 同
 動くもの金魚と時計なる茶の間 同 同
 夜々蜘蛛と灯火管制せし昔 福山 竹下陶子
 心傾けて語れる団扇かな 同 同
 人の世の終末も風薫るべし 同 同
 富嶽とは遠望よけれ山開 神戸 千原叡子
 雷雲の時つ西へハイウエー 同 同
 雷神の雲踏みはづしたる音か 同 同
 夕焼の海へしたたる辺りかな 東京 今井千鶴子
 夕焼のさめ満天の星となる 同 同
 別れにはいつも明日ありビールあり 同 同
 旅西へ祇園祭を通過せり 長岡 安原 葉
 峰仰ぎをれば谷より時鳥 同 同
 蛆といふ出題も彼らしきかな 同 同
 豪華船も碇泊してゐ揚花火 熱海 嶋田一歩
 花火終へ残りたるもの月と海 同 同
 花火終へ人波去りて波の音 同 同

風よりも涼しく彼の待つてをり 静岡 須藤常央
 新宿のビルの灯高し火取虫 同 同
 黒南風の鴉の翼大きくす 同 同
 相聞の蝶とし空へ空へかな 熊本 岩岡中正
 祝婚の噴水高く高くあれ 同 同
 涼風のやうに歩いてみたきかな 同 同
 夏やせに白粥冷やし梅冷やし 樺原 稲岡 長
 夕焼の冷めゆく子細車窓より 同 同
 一塊の空気動かし来る団扇 同 同
 奈良老舗涼し墨の香木彫の香 奈良 古賀しづれ
 空蟬の鼓動を打つてゐるやうな 同 同
 蟬死して春日原生林に帰す 同 同
 ナイターや溜息となる浜の風 神戸 山田佳乃
 食むよりは啜るアイスクリームかな 同 同
 はづれくじばかりの夜店後にして 同 同
 離陸して残暑の神戸置き去りに 同 同
 帯広の一步新涼への一步 同 同
 靴いつか濡れ色となり花野行く 同 同
 蟬時雨逃れたき耳慣れてゆく 香川 湯川 雅
 杜に立つ音の柱や蟬時雨 同 同
 炎天下路歪み人歪み来る 同 同
 退屈を泡に変へたる金魚かな 袋井 湖東紀子
 心太するりと風の通りけり 同 同
 涼しさへ落ちてゆきたる夕日かな 同 同

雑詠句評(十一月号より)

静 龍・中 正・保 佳

千鶴子・美 奇・葉

眞理子・とほ歩・憲 明

むつみ・廣太郎

名園の三食つきの通し鴨 東京 橋本くに彦

一読して、「三食つき」という面白い表現に思わず拍手を送った。私たちの住んでいる田舎の農業用溜池、また河川に住んでいる通し鴨たちに餌を与えるという習慣は無い。嘗ては水鳥公園などは冬場には餌が少なくなるので餌を撒いている光景を良く見ることがあったが、近年、鳥インフルエンザの感染源に餌が媒介するのではないかと(餌にいろんな鳥が集まることを含めて)という懸念から、今では餌を全く与えないという。

掲句は、都心の名園という池に鴨が北に帰らず住み着き、来園者にも次第に慣れ愛らしい振る舞いをするので人気者となり、餌をもらうこともあるのであろう。鴨たちは北国に帰る苦勞より餌の心配のいらぬこの池畔に住んで、子育てをする方が安全な生涯を送れるのかもしれない。

池の管理者や見学者に親しまれている通し鴨に対して、作者のやさしい思いが読者に伝わってくる。(静龍)

本来の「通し鴨」とは、怪我をしたりして、渡る事が出来なく

なってしまった鴨が留まる、という事を聞いたが、最近では人間が餌付けをしてしまって、それに味を占めてしまった鴨が残っている、という事も聞いた。差詰め三食昼寝付ならぬ三食浮寝付でもなるのだろうか。視点が面白い。(廣太郎)

滝壺は水を宥めてゐるところ 奈良 古賀しづれ

滝を詠むのにも色々ポイントがあるが、この句は滝壺に焦点を当てて、水の躍動を詠んでいる。次々と落下して、滝壺はまるで沸騰する水の坩堝。この滝壺が荒れ狂う滝水を「宥めてゐる」と擬人化して詠んだところが、ユニーク。

滝はその滝壺のところで、激(たぎ)つ水を、まるで母のようにあやして抱擁する。そしてこの滝壺から、水は再び川となって流れ出て、大地を潤してゆく。つまり、滝壺はまさに水の摇篮(ゆりかご)。作者のまなざしも、母のように大らかであたたか。ふとこの大きな一句である。(中止)

特に大きな滝であると、落差も相俟って、上から落ちてくる水は物凄く迫力があるだろう。そして最後には「滝壺」に落ちるのだが、そこで水の動きは、確かに静寂を取り戻したかのように感じる場所がある。それを「水を宥めてゐる」と表現した事によって、何か動から静への安堵のようなものを感じる。(廣太郎)

(以下略)

天地有情

失ひし刻を涼しく思ひをり
 倒れ木も朽木もありて沢涼し
 龜鳴くや駅名変はり塔が建ち
 花屑を巻き上げて行く人力車
 虚子恋し年尾恋しと瓢の笛
 俳譜の卒寿の日焼けたるかひ
 里春の名入れ団扇も旧りしかな
 梅雨傘を拭ひてをさむ旅靴
 泉下とは朴の咲く下妻眠る
 万緑の底ひに小さく妻の墓
 左手に指輪光りて秋に入る
 今は昔虚子といふ人秋の晴
 夕焼の冷めて丹波の狐どち
 大夕焼木津川の水小焼かな
 大夕焼褪めてしばらく灯をつけず
 佐比売野の星と語れる句碑涼し
 夏帽子一寸あみだにしてかぶり
 掛け並ぶみな真つ白の夏帽子

明石 中杉隆世
 同
 東京 稲畑廣太郎
 同
 福山 竹下陶子
 同
 長岡 安原 葉
 同
 相模原 木村享史
 同
 東京 今井千鶴子
 同
 樞原 稲岡 長
 同
 東京 河野美奇
 同
 我孫子 副島いみ子
 同

父を待つやうに雷待つ信濃の夜
 水引の花とは眩くごとく咲く
 文芸のけふも汗して行くところ
 文芸の汗重きとき軽きとき
 平凡な一と日の終り大夕焼
 明日への祈りとなれり大夕焼
 底紅を慕ふ心のいつまでも
 向日葵の黄には負けられぬと思ふ
 白山を咫尺に星の風涼し
 梅雨滝に風も吞まれてゐる秘境
 みんみんの園や東京ど真ん中
 大胆にそれも打水おほざつば
 涼風のある路地もまた古都らしく
 飛火野の果ての果てより星涼し
 村里を彼方此方と道をしへ
 つぎつぎに楽しき雲や梅雨明けぬ
 みよし野に花よ星よと遊びをり
 そよぐ花思ひ出したるやうに風

神戸 長山あや
 同
 熊本 岩岡中正
 同
 東京 岩村恵子
 同
 神戸 後藤比奈夫
 同
 金沢 藤浦昭代
 同
 東京 橋本くに彦
 同
 龍ヶ崎 今橋眞理子
 同
 仙台 赤川誓城
 同
 東京 今井肖子
 同

心子選

天地有情句評

汀子

里春の名入れ団扇も旧りしかな 長岡 安原 葉

祇園の芸妓里春を偲ぶ。

泉下とは朴の咲く下妻眠る 相模原 木村享史

妻恋。

失ひし刻を涼しく思ひをり 明石 中杉隆世

失った過去の時間は現在に生かして行く。

亀鳴くや駅名変はり塔が建ち 東京 稲畑廣太郎

変化の多い時間の過去と未来。

俳諧の卒寿の日焼けたるかひな 福山 竹下陶子

躰鏢とした作者の日焼け。

過去と現在を結ぶ結婚指輪。

左手に指輪光りて秋に入る 東京 今井千鶴子

大夕焼木津川の水小焼かな 檀原 稲岡 長

大夕焼の下を流れる木津川の染まった流れ。

佐比売野の星と語れる句碑涼し 東京 河野美奇

三瓶山の句碑の真夜に心を寄せる。

(以下略)